

北海道文教大学 外国語学部 国際言語学科

2012 (H24) 年度

自己点検・評価報告書

2012 (H24) 年 12 月 27 日

4 教育内容・方法・成果

◎ 目標・方針

「教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針」

(1) 教育目標に基づき学位授与方針を明示しているか

本学科の教育課程は、インターネットその他の技術革新に伴う経済活動の急速な変化により、世界のあらゆる地域がグローバル化する時代に突入したことに伴い、この社会変化に対応できる人材を育てるために作られた。本学科の教育課程は、大学設置基準第19条第1項を踏まえ、海外は勿論、国内にも増えつつある「多言語社会・多文化社会に対応できる」人材を育てるために、「言語教育だけでなく」「国際的な感覚と高度な語学力を備え、異文化に対する正しい理解と協調の精神を持ち、国際社会の中で主体的に行動できる総合的な判断力」を兼ね備えた人材を養成することを目的に作られ、運営されている。

この目的を美しい謳い文句だけで終わらないために、国際言語学科の特徴として、一つの大きな工夫を組み込んでいる。それは、最初の1年目を「自分が本当に学びたい言語は何か」という問いに学生自身が真剣に取り組む年とし、その間に確信をもって答えさせることである。この答を見つけるための1年を置くことによって、その後の3年間、失速せず、挫折せず、継続して言語学習に取り組み続けるための動機付けを与え、真に仕事で役に立つ言語能力を身につけさせることである。このことを、学生募集時のさまざまな刊行物、入学後の学科オリエンテーションで配布する『学生便覧』（「資料1」）等の資料など、あらゆる機会を通して知らせている。

(2) 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか

本学科では、新学科として開始した平成21年度から、教育課程の編成や実施方針を新年度の開始時に当該年度の『学生便覧』に明示し、特に、旧3学科との共通点や違いを明確にさせ、旧学科の学生には「何かがなくなってしまった」という喪失感やそれに起因する混乱がないように、また、新学科の学生には、本学部が新学科体制に刷新されたことで、さらに一層の質的改善がなされたことが十分に伝わるように配慮してきた。文字にして配布するだけでは伝わらない部分については、オリエンテーション時で詳しく説明すると同時に、各教員が、アドバイザー（旧3学科の学生に適用する呼称）又は担任（国際言語学科の学生に適用する呼称）として担当の学生に周知徹底するように配慮している。

(3) 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針が、大学の構成員（教職員及び学生等）に周知され、社会に公表されているか

本学では、学科に所属する学生が到達すべき教育目標と、その目標を達成し、学位を取得するために知るべき諸事項を学生生活の全般にわたって説明するための手引として『学生便覧』を配布している。その『学生便覧』を用いて、学科の学生・教員が全員出席するオリエンテーションで、学科の基本的な教育目標とその達成までに必要な諸事項

を詳細にわたって説明し、学生の間にも、教員の間にも間違った理解がないように配慮している。さらに、教育目標の実現にあたって最も重要な学生の単位履修とそのための指導において支障が生じないよう、4年間の学習の進捗状況が一目で把握できる、国際言語学科が独自に作成した「履修単位チェック表」（「資料4」）をオリエンテーションで配布し、学生にその記入を義務付け、各年度の前期と後期のはじめの2回、担任に提出させ、担任がそれをチェックするようにしている。半期に一度の履修登録時に学生がこの「チェック表」に自分の手で必要事項を記入し、それを担任と共有することによって、学生に自分の学修状況を可視化させている。この「履修単位チェック表」は、大学での自分の学びと今後の努力目標をしっかりと理解できるよう支援するのが目的である。また、ウェブ上で履修登録が完了できるため、かりに学生がこの「チェック表」の記入と提出を怠っても、昨年度から導入され全学データ管理システム（Universal Passport、以下「ユニパ」）によって、担任教員は、自分が担任している全ての学生の履修登録状況をウェブ上で確認し、問題があればすぐに対応できるようになっている。この「チェック表」は、これを提出しない学生の学修意欲を判断する一つのバロメータともなるため、問題がある場合には、適宜連絡を取り、学生を呼び出して指導するようにしている。

社会に対する公表の方法としては、インターネット上の大学のホームページに、高校生やその保護者を念頭に置いて、一般的な読者向けの、わかりやすいことばと表現方法で本学科の教育目標やそのための教育課程の詳細を公表している。また、学生からのどんな質問に対しても答えることができるような体制を整えている。

- (4) 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性について定期的に検証を行っているか

教育課程の編成や実施の方針が適切かどうかは、(1) 学生にアンケート（「資料5」）を実施し、直接聞くこと、(2) 学科会議などで適宜問題点を検討していくこと、(3) 用意された授業科目の履修登録数や及第・落第比率といった客観データを確認すること、(4) 休学者や退学者の数、さらには、(5) 学生募集の状況や高校の進路指導の担当者などから得られる情報などによって、直接的、間接的に検証することができる。本学科では、上記の(1)～(5)のすべてにおいて随時検討、検証を行っている。

1 現状の説明

「教育課程・教育内容」

- (1) 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか

新学科申請時とは異なり、受け入れた個々の学生の資質や学修状況を見ながら、必要に応じて、随時教育課程の編成・実施について微調整を行っている。その調整は、具体的には、毎年次年度の授業計画における開講科目やクラス数及び担当教員配置の変更や履修規則の運用方法の改善といった事項の中で行っている。この調整過程は、学生への直接調査や履修登録データに基づく教務委員の提案から始まって、学科長との調整会議、学科での審議を経て学長との折衝等、いくつもの段階を経て、その妥当性を検討する体

制が整っている。

- (2) 教育課程の編成・実施方針に基づき、学士課程に相応しい教育内容を提供しているか
専門学校と大学との一般的な違いを反映し、単に語学ができるだけではなく、幅広い教養に裏づけられた語学力を目指すために、できる限り多様で、学生が関心を持ちやすく、なおかつ、専門の勉強への橋渡しとなるような教養科目を開講している。本学での教育課程の長所・短所については、附属高校からの直接的なフィードバックによって、高校から大学への接続上のニーズに応えているかどうかにも注意を払っている。同時に、学士課程と大学院での教育にかかわっている教員が、本学部の学資課程から大学院に進んだ学生の実情をつぶさに観察することによって、高等教育で必要とされる能力を十分に身につけさせているかどうかについても留意、点検し、本学部の学士課程の長所・短所に関する情報を吸収するように努めている。

「教育方法」

- (1) 教育方法および学習指導は適切か

○ 学習成果の重視

本学のモットーである《実学重視の教育》を具体的に実現していくための努力の一環として、「(学習者は) ~することができるようになる」という目標達成志向のシラバスを作成するよう教員への指導を徹底している。毎回の授業の内容も、ただ知識として教えるだけではなく、それを聞いて理解することによって学生は何ができるようになるのかという観点から記述するよう要求されており、学科長が全シラバスをチェックするようになっている(「資料2」)。こうして、シラバスに基づき、知識を得るだけではなく、それを生かして何ができるようになるのかという点を重視した教育を実現すべく指導がなされている。そのような指導を実現するための評価の方法も、ウェブ上に公開されているシラバスを通して、全学生、全教職員に公開されており、公表された内容に忠実に則った指導が行われている。

○ 少人数制

語学教育を中心に展開する本学科では、少人数による語学教育が教育指導の根幹であり、それを保障するために最大限の努力を行なっている。英語・中国語の基礎語学クラスをはじめ、日本語による文章表現の指導を行なう基礎ゼミ、日本語文章表現法のクラスでは、履修登録者数の増減に常に目を配りながら、1クラス20(基礎ゼミ)~25名(基礎語学クラス、「日本語文章表現法演習」)を目安に開講し、語学教育の質的維持を図っている。一方、一般教養の科目においては、学生の関心を喚起できるような科目を設置しているので、いきおい、履修者が増え、大人数のクラスになっている。それでも、100名を超える教養科目は、各科目担当教員の負担を軽減し、きめこまやかな履修指導できるようクラスを分けるように努力している。

- (2) シラバスに基づいて授業が展開されているか

シラバス通りに授業が行われているかどうかを客観的に検証する方法として、本学科では(a) 学生評価アンケートの実施と点検(「資料3」)、(b) 教員による授業の相互参観

と、参観教員と被参観教員による報告書の提出、(c) 上記(a)及び(b)からのデータに基づく、学科長によるシラバスの査読と面談、という3つの手段を採用している。これによって、シラバスが目標達成志向の書き方をされているか、また、それが学生に分かりやすく書かれているか、それを学生が読み、認識したうえで教員の授業評価を行っているか、そして、アンケートや他の教員からのフィードバックを各教員が確かに次年度の授業改善へと生かしているかをチェックできるようになっている。

(3) 成績評価と単位認定は適切に行われているか

本学科における単位認定は、教員による対面授業による成績評価と、学科の教育課程外における学生の自律的・自主的学習によるさまざまな学習業績の認定評価の二つからなる。前者の評価は各担当教員に委ねられているが、後者は、国際言語学科が行っている。評価の適切性については、(a) 単位に対する学生の「疑義申し立て」の数、(b) 各科目毎のAA～Dの分布、(c) 特定学生が複数の類似科目で得たAA～Dの成績評価の分布状況、の3種類のデータを見ることによって観測することができる。(a)については、2011年度後期は、全体で4名4件、2012年度前期は6名6件。後者の1件が不適切評価に関するものであったことを除いて、すべて単純な入力ミスに原因するものであった。また、(b) 各科目毎のAA～Dの分布がどうなっているか、特にAAとDの評価に極端な偏りがないか、教務課から入手可能なデータを見ることによって適宜確認するよう努めている。また、日常的には、ユニパを通して担任が(c)類のデータを簡単に入手できるようになり、自分の担任している学生の成績が類似科目間で異常な食い違いを示していれば、それによって、特定教員の指導や評価に問題がある可能性を検知することができるようになっており、実際、昨年度にはそのようなケースがあったが、改善により、今年度はなかった。

(4) 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結び付けているか

○ 学力の伸びの客観的検証

英語教育については、毎年1, 2年生に英語プレースメントテストを受験させ、各年度の学生達の語学力を客観的に測定できるように努めている。

また、学内を実施会場として「英検」や「TOEIC IP」などを行なうことを通して学生の学力の伸びを直接把握するだけではなく、「中国語検定」や「漢字検定」などの学外での受検を奨励し、そうした語学能力テストや資格試験の結果を、オリエンテーションでのアンケート調査を通して把握するように努め、完全ではないが、できるだけ学生の知識や技能の成長を追うよう努力している。これらの学生データをまとめて担任に配布する努力も行い、学生、教員が日頃の学習と教育の成果を常に意識して、授業や授業外での学修に臨めるよう努力している。

○ 基礎ゼミの指導効果の測定

また、日本人学生にとっては全ての言語学習の根幹をなす日本語の能力を充実させ、留学生にあっては、大学での学修の基盤となる日本語能力を確実に習得させるため、1年次前期・後期に「基礎ゼミ」のI及びIIを配置し、少人数クラスで、日本語表現能力や大学での学修・調査に必要な基本技能の習得を助けている。昨年度からは、全ゼミ共通テストを導入し、指導内容の統一性と学習成果の確認を可能にした。結果として、文

章を読んでまとめる力がついたものの、正しい敬語の使用や慣用句・故事成語の知識など、日本語基礎力が不足しているという事実が明確になり、基礎ゼミの内容改善に役立った。担当者以外の教員も問題作成や採点にあたるなどの工夫を通して、基幹科目の基礎ゼミにおける指導内容の充実を図り、本学科の学生の進歩を全教員が学科として支援していく体制が整いつつある。

「成 果」

(1) 教育目標に沿った成果が上がっているか

複数言語を主言語として学べるようにすることを学科の最優先して時間割を組み、複数言語を本気で学べるよう保障した国際言語学科の教育課程が学生のやる気を鼓舞して、旧3学科時代にはなかった学習成果を生み出している。

○ 中国語教育の充実と中国語学習者の増加

旧中国語コミュニケーション学科時代、中国語教員は、大幅な定員割れを打開するために、指導方法を改善し、短期間で大きな成果を上げる努力を重ねた。国際言語学科では、その成果が現れ、主言語を中国語として学ぶ学生数（41名）が英語を主言語とする学生数（27名）を大きく上回るまでになっている（数字は、今年度の2年次日本人学生88名対象の調査結果。20名は日本語を主言語とする）。国際言語学科では、1年目は、自分が本当に学びたい言語が何語なのかを見きわめる年で、それ以後の3年間を決定付ける重要な期間であると認識している。その重要な1年目に、中国語に関心を覚え、国際言語学科の新設時には予想していなかった数の学生が中国語を主言語として履修しており、この傾向は定着しつつある。

○ 複数言語学習者の存在

国際言語学科では、複数言語の習得を目指すよう学生を励ましながら各言語を指導している。このことで、昨年度以来2年連続して、英語や日本語を主言語として学ぶ学生も中国に留学している。この割合が増えていくよう、一層の努力が望まれる。

○ 英語プログラムの充実

昨年同様今年も2年生でTOEIC700点を突破する学生が現れるなど、旧英米語コミュニケーション学科では見られなかった現象が続いている。また、本学科の英語教育の目玉である「演劇を通して英語を学ぶ」アプローチも定着し、1、2年生が参加学生の4割強を占める状態が続いている。

(2) 学位授与（卒業認定）は適切に行われているか

国際言語学科は、開設後3年目にあたり、卒業認定を行なっていないが、外国語学部の旧学科においては、学生の成績情報に基づいて、学科会議、教務委員会、教授会を経て毎年適切に行なわれていた。ただ、卒業要件を厳密に満たしていない学生に対する直前の情状酌量的措置が全面的に撤廃され、履修指導の徹底と卒業要件の厳密な遵守がすでに旧学科時代より慣習化しており、今後国際言語学科の学生が卒業時を迎えるにあたって、適切に行なわれていくものと考えられる。

2 点検・評価

① 成果が上がっている事項

○ 行動する学生の姿勢—「資格・検定」単位の認定数と種類

本学科の3年次以降の科目は「行動科目」群と称される。3年次以降は、どの科目を履修する場合でも、ただ漫然と履修するのではなく、1、2年次に培った語学力を自分の関心や興味のある分野で具体的に生かすために学ぶという科目の正確を表している。理念にとどまらず、具体的に「資格・検定」や「国際言語研修」、「総合言語実践」という認定科目を設け、課外でのインターンシップや、ボランティア活動、海外研修などの実践的学修を奨励している。多種の資格試験に合格し、「資格・検定」Ⅰ～Ⅳで最大8単位の認定を受ける学生が出るなど、こうした指導の成果が現れ始めている。

○ 行動する学生の姿勢—学外の語学コンテストで示された成果

中国語では、13名もの学生が1年間中国に留学している。その成果は、各種中国語コンテストで上げられた成果に現れている。平成24年10月28（日）かでの2・7で行なわれた「2012年度全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会」では、本学科の4年生と3年生が出場し、4年生は弁論の部で優勝し全国大会に出場、3年生は朗読の部で準優勝という素晴らしい成果を収めた。また、今年度も昨年度に続いて本学科から1名が中国政府の国費留学生に選ばれ、中国政府奨学金留学生としての名誉ある留学生資格を獲得した。

○ 行動する学生の姿勢—アシスタント・ティーチャープログラムへの参加者

本学科では、教職課程で学ぶ学生の全員が地元の小・中学校の授業現場に「アシスタント・ティーチャー」としてボランティア参加し、補助教師役として子どもたちの指導に当たっている。この経験が、旧カリキュラムの教職志望の学生たちにとって、卒業要件として認められない教職科目の履修を乗り越える強い動機付けになってきた。国際言語学科としてはまだ教員採用試験受験者を出していないが、成果が期待される。

② 改善すべき事項

○ 英語プログラムをより一層魅力あるものにするための努力の必要

中国語を主言語として選ぶ学生数の増加という現象は、英語を主言語として学ぶ学生の減少を意味している。中学、高校と続く英語学習の場合と著しく異なり、中国語の学習には、自分にとって既知の文字（漢字）を手がかりに、ネイティブと日本人の両方から徹底した音声指導を受ける。その学習過程から得られる「学ぶ」喜び、「伸びを体感する」喜びは、学生を中国語学習へと向かわせる強い動機付けとなっている。この動機付けを上回るような魅力ある英語の授業を展開することが目下の英語プログラムの目標となっている。昨年度に続いて、今年度も中国語科目履修者の増加と英語科目履修者の減少傾向が見られた。英語教員の一層の努力が求められている。

○ TOEICや英検受験の義務化

外国語学部では、2007年以来、毎年2回TOEIC IPテストを実施している。今年度までは、2年次の終了までに必ず1回英検またはTOEIC（公開又はIPテスト）を受験するよう指導してきたが、まだ100%の受験率を達成していない。今後は受験を義務化すべきだと考える。なぜなら、10～990の間で英語能力（聞く力と読む力）を比率尺度的に

測定する TOEIC を受験することは、学生の努力はもちろん、本学会の英語プログラムの指導効果を客観的に可視化することにもなるからである。

○ 基礎ゼミの少人数制の確保

2012 年度は 4 名しか配置できなかったために、基礎ゼミ履修対象者が 計 106 名で、教員 1 人当たり 26～27 名となってしまった。これでは十分な日本語力の養成は難しい。来年度は万難を排して各基礎ゼミ 20 名未満を実現する必要がある。

3 将来に向けた発展方策

① 効果が上がっている事項

本学部学生の大多数を占める日本人学生にとって本当の意味での外国語である英語と中国語を本気で両方同時に学んでいる学生はまだ数名だが、そのような学生が存在すること自体はすばらしいことである。この学生たちが、両方とも本当に仕事で役に立つレベルにまで能力を向上させることができるよう支援していくための具体策を考えていくことがこれからの大きな課題になる。

② 改善すべき事項

○ 教育課程への e ラーニングの活用

現状では、教職を志す優秀な学生が、海外研修で 1 年間の留学をすると、教職課程を 4 年で終えられなくなるという問題がある。来年度は完成年度を迎えるので、これを解決したい。同じようなことが、インターンシップ科目についても言える。そのためには、必修諸科目の学年配置のしかたは勿論、科目そのものを学外でも履修できる方式、即ち、e ラーニングによる学修が可能になる方向へ変えていく必要がある。

○ 学生ポートフォリオに向けて

担当する学生の学力の伸びを教員が学生とともに追っていけるようデータの収集と共有を進めているが、担当する教務委員の負担が大きい。現在稼働している全学データ管理システム「ユニパ」にこうしたデータを統合して、学生のデジタルポートフォリオを作り上げていく方法を具体的に研究していく必要がある。

4 根拠資料

- 資料－1 『北海道文教大学外国語学部 2012 学生便覧』
- 資料－2 『北海道文教大学外国語学部 2012 シラバス』
- 資料－3 「北海道文教大学・北海道文教大学大学院 学生による授業評価用紙」
- 資料－4 「履修単位チェック表」
- 資料－5 「国際言語学科アンケート調査用紙」

国際言語学科 自己点検評価実施委員

役名	氏名		
委員長	教授	高橋 順一	学科長
委員	教授	久野 寛之	大学評価委員会委員